羊 毛

別 宮 不二雄

結論を先に言うならば、原毛の供給は、急にではないが、そして短期的に見れば迂余曲折はあろうが、次第にタイトになるであろう。人為的に増産出来る合繊と同じペースで羊の数を増やすことは不可能であるし、むしろ、ここ二、三年のような減産傾向を辿るか、現状を維持出来るか、或いは消費国の期待通りに徐々にでも増産に転ずるか、今の状態ではその見通しは非常に難しい。いずれにしても、適性値段で需要に応じ得る原毛の供給量の確保は次第に難しくなるのではない。

オーストラリアの広漠たる牧場に立つと、いくらでも羊頭数を増やすことが可能のように思える。然し、これには、大きく言えば、色々の世界的経済動向と自然現象に影響される複雑な問題がからんでいるのである。

1. 産毛国の現状

産毛国と言っても沢山あるが、大勢は大同小異であるので、ここではオーストラリアの事情のみにふれる。

先ず、ここ数年の羊頭数の推移をお眼にかけろ。

豪州に於る羊頭数の推移

(単位:百万頭)

1966 / 67	164
67 / 68	167
68 / 69	175
69 / 70	180
70 / 71	178
71 / 72	164
72 / 73	148

1969/70年まで順調に増えつづけて来た(と言ってもその増加率は年5%以下)羊頭数は一転急激な減少に転じた。その主原因は、71年頃から豪州を襲った未曾有の大かんばつによる大量の羊の死亡と売却であるが、世界的不況と一部の西欧諸国、とくにアメリカでの需要減による原毛値段の暴落のために、牧羊業者が、牧羊に意欲を失い牧牛や穀物に転換して行ったためである。

たとえば日本が主に買付けるタイプのもの(78B)で、

1970年頃迄キロ当たり200~230セントと落ちていたものが、1971年秋には130セントに下っていった。これでは牧場の維持も出来ないし、それに加えて世界的食糧不足から、牛肉や小麦が高値を呼んでいる現状から、他の農業へ転換するのは当然だろう。

72年の秋頃から景気の回復と共に天然繊維ブームが起り、今度は原毛価格がどんどん上り600セントと言う一年前の4~5倍の値段につり上った。今は(11月20日)350セント位に落ち着いているが、こう値段が不安定では牧羊業者も安心して羊を飼ってられない。豪州政府としても、原毛の売買取引が競売制度をとる限り、世界の経済の動きがもろに影響するので手をつけられない。幸いにも、羊頭数の減少傾向はここ一年の原毛の高値の為に、どうやら食い止められそうであるが、このような事情から原毛供給の不安定が憂慮されているわけである。

当然の事ながら羊毛は合繊と値段の点では競合出来ない。然し、合繊が懸命に合理化に努力してコストを下げているのに比較して、羊毛産業(羊毛工業ではない)のおくれは甚だしい。天然産物であり、農業という最も保守的なものであり、国際的商品であるがために、その合理化は決して容易なものではないのは理解出来るにしても、ここ数十年その集荷販売方式に何等の進歩がないのでは、人件費、輸送費、販売費等のコストアップは吸収出来ない。

しかし、ここ2、3年の急激な変動は、牧羊業者及び豪州政府に強い刺激を与え、集荷販売方式の合理化が、徐々にではあるが進行している。

その一つは、objective measurementとsale by sampleと称する計画である。競売の日の午前中に、競売される全部の羊毛が俵につめられて展示され、バイヤーがそれを見て評価し、競売に臨むのが従来の方式であるが、この新しいシステムは、グリース等の不純物含有量、織度などを科学的に測定し、そのデータと少量の代表サンプルのみを展示する、と言うもので、これにより輸送、搬入等のコストが大幅に軽減出来、すでに一部実行にうつされている。関係外の読者にとっては意外かも知れぬが、こんなことが、やっと今になって始まった、というのが現状で、また、農産物の集荷販売の合理化の難しさを語るものでもあろう。特に殆どが国外に売られる国際商品だけにである。

— Wool —

FUJIO BEKKU (Technical Manager)
International Wool Secretariat, Japan
Branch. (PhD)

国際羊毛事務局 技術部長(工博)

輸送方法も、コンテナ輸送とか、high density dumping と言って、より多くの原毛を俵につめこむ方式とか、すでに実行に移されている合理化部門もある。

農場の統合も叫ばれているが、矢張り日本の農家の統合問題と同じで容易に進まない。

合理化とは直接関係ないが、原毛の流通販売方式に関連して、二つの大きな改革が検討されている。その一つは、政府の直営機関が原毛を一括買上げ、販売しようとするもので、これにより、牧羊業者の最低収入が保証される。今の方式では、牧羊業者がブローカーに売るが、自分の羊毛が競売で実際に売れるまでは、いくら収入があるか分らない。期待以上の値ならよいが、逆の場合もある。これでは不安で、積極的増産意欲はわかない、という心配がある。

いま一つの問題は、競売による販売方式である。現在、産毛国(売手)でも消費国(買手)でも、この方式を支持する声は高い。ただ問題は、需給のバランスがとれている間はよいが、需要が減退した時は暴落し、逆の時は暴騰する。何れも両方にとって好ましいことではない。このように原毛の値段が動くのでは牧羊業者が安心して羊毛の生産に従事出来ず、従って減産傾向が続くと、消費国家にとって他の資源同様、原料不足に悩むことになる。

この販売方式について、最近豪州の政権をとった労働党内閣は、資源ナショナリズムを打出し、その一環として原毛の競売方式の代りに豪州と各消費国との間の長期契約販売方式を提案して来た。資源が有限であり、これを合理的な値段で売り、また消費国が量を確保する、という点では一見理解出来る提案であるが、実行面では色々の問題があろう。

以上、産毛国の現状の主要部分のみを述べてきたのであるが、短期的には色々の変動もあろうが、長期的には供給不足の傾向にあり、従って、従来のような、売手と買手という純粹に対立的立場を取ってはいは駄目で、両者が互に相手の立場をも理解し、共に満足しうる環境で、生産と必要量の確保に努力すべき時代が来ているといえよう。

2. 消費国の現状

ここで、供給の現状と共に、需要の推移を見ておかねばなるまい。

一般に毛製品の推移について、大きな認識不足がある。毛製品は合繊と混紡に代替され、減少の一途を辿っているかのような錯覚を持つ人が多いが、これは事実と反する。感覚として持たれるのは理解出来るし、事実量的には、合繊の方が圧倒的に多く、原料的制約の為に、全繊維消費量中に占める毛のシェアは年々減少す

るのは当然である。だが、世界的に、羊毛の消費量は年平均2及至3%増加しつつある。アメリカ、英国では減少しているが、日本では年5%増加し、共産国及び発展途上国では、生活水準の向上及び人口増により着実に増加している。事実、豪州の競売で、日本とソ連、東欧諸国が原毛買付をせり合うことは普通の事である。この増加率は、合繊の増加率に較べるとわずかなものであるが、1にのべた供給状況を考えてと健全と言える。

混紡についても、羊毛が合繊で薄められると、製品の量が非常にふえるので、如何にも純毛から混紡へ急速にうつっているような感じを与えるし、事実混紡は徐々に増加しているが、純毛も着実に増えているのである。日本では、その輸入する原毛の75~80%が純毛を作るのに使われている、という統計データが事実を何よりも示している。

嘗てのように、羊毛と合繊がマーケットでシェアを競い合う、と言う時代ではなくなりつつある。純毛、合繊、混紡のそれぞれの最終製品が、それぞれのメリットの上に、マーケットシェアを定着しつつあるのが現状であろう。

因みに、日本は今、世界一の羊毛消費国で、下の表に示すように、原毛の輸入量は着実に増え、1972/73年には、豪州で生産された原毛の約40%を買付けてしまっている。

日本の原毛輸入量の推移

(単位:1,000俵、

1俵は約300ポンド)

1965/66	2,023
66/67	1,883
67/68	1,970
68/69	2,260
69/70	2,404
70/71	2,072
71/72	2,680
72/73	2,895

さて、限定された原毛資源の供給、さらには、世界的インフレによる原毛価格上昇の状況下で、またあらゆるコストのアップに対応して、羊毛産業が、安定した産業として生きて行く為には、限られた量の貴重な原毛を、上手に、そしてより安いコストで製品に加工し、徐々にではあるが、着実に増える需要に応ずる、の一語につきる。

産毛国でも、さきにのべた合理化以外に羊種の改良、双生子羊の頻度増大等の生物学的努力も行なわれているが、短期的にその効果は期待出来ず、消費国での努力に負うところが大きい。

事実、色々の努力が試みられているが、その主なものを二、三取上げてみよう。

日本は細番手梳毛製品が圧倒的に多いから、どうしても豪州産メリノへの依存度が高い。日本へ入ってくる原毛の80%が豪州からくる。もっと他の国、例えば南アメリカ、南アフリカ等から広く買付けて量を確保すべきであるという意見がある。品質の問題、輸送コスト、供給の不安定など難しい問題があって、なかなか実現はむづかしいが、どうしてもこの方向に向わざるを得ないであろう。ただ品質の問題は、加工技術の工夫によって或る程度カバー出来る余地はあろう。日本政府は、資金援助をしても、牧羊可能な国々の増産を促進し、原毛量を確保しようとしている。実際に、広大な中国で牧羊を振興して貰うことを真剣に考えている人すらいる。牧羊は土地、気候の条件が極めてきびしいから、どこでもというわけに行かないが、あの広い中国には、どこか適当な牧羊可能地域が案外あるかもしれない。中国でも羊毛は生産されている。しかし、中国羊毛は、印度羊毛やパキスタン羊毛などのように粗硬で、ニュージーランド及び英国羊毛のカーベット原料にまぜて使うしか使い道がない。だが、品種改良、飼育地域の研究をすることにより、せめてニュージーランド羊毛位の品質にすることは、必ずしも不可能でないかもしれない。そうすれば、製造技術の工夫により、アパレルへの用途も開けてくるであろう。

限られた原料を上手に使うのに、大別して二つの考え方があろう。一つは、付加価値の高い高級純毛製品の製造を指向するものである。高級品といっても、莫然とした、単に高価なもの、という意味ではなく、ファッション的にも、品質的にも、高い代価を払う消費者を満足させるものでなければならず、これにより顧客をつかみ、製造業者は一定量の原毛使用でより高い利潤を得ようとする。ただ強調したいことは、色柄がアトラティブで

恰好がよくても、着用機能が高いものでなくては高級品といえまいと言う事である。如何に外観だけは高級品に見えても、型崩れするスーツ、数回の洗濯でフェルト収縮してしまうセーターなどは、長い間には消費者の信頼を失ってしまうものであろう。

今一つの方向は混紡交織編である。これにより純毛の欠点を補い、更には純毛では作れない新製品を出す。例えば非常に薄い編地等はその後者の例であろう。羊毛の持つ吸湿性を考えれば、軽くてうすい編地などは、初夏の絶好の衣料であるが、技術的にも、コスト的にも純毛では限界がある。これを合織の特質を借りてカバーしようとするものである。ただ、羊毛という原料は高いから、安い合織を混ぜて原料コストをうすめることを目的とする混紡は本道ではあるまい。長期的視野に立った場合、このような中途半端なものはマーケットに定着せず、値くずれの危険も大きい。結果的には、大切な原料の上手な使い方にはならないのではあるまいか。

天然資源の重要さ、そしてその有限な供給のきびしさは、今度のアラブ諸国の石油供給制限で、世界中がいやという程知らされた。合織とて原料を迎れば同じであるが、原毛はその点ではずばり天然資源とも言える。日本を含む先進国が、自分の国のことだけを考えていたのでは、資源の確保も、それを用いる工業も、これからは次第に困難になろう。資源を持つ国は強気である。一方発展途上国には先進国の何倍もの人間がいて、より高い生活水準を求めて努力している。これらの人々の羊毛消費料は一人当たり末だ微々たるものだが、今後増えることはあっても減ることはあるまい。かかる状況に常に留意し、世界の一つのリーダーとしての心構えの下に、資源の確保と活用を図るのが、これからの日本の羊毛工業の道であらう。

(昭和48年11月21日受理)